

獣害の歴史

弥生時代

弥生時代は、紀元前10世紀頃から紀元後3世紀中頃までにあたる時代で、魏志倭人伝に出てくる卑弥呼が国を治めていた時代と重複します。

稲作や金属器や織物など、新しい技術や文化が中国大陸や朝鮮半島からもたらされ、衣食住の生活も狩猟採集の縄文時代から変化していきます。稲作の農耕サイクルに合わせて確立されていった新しい生活パターンは、その後の日本の農村生活の原形になっていったと考えられています。

弥生時代は、日本ではじめて「米」が主食となった時代です。



灌漑用水
登呂遺跡

人々は安定的・効率的な米の収穫のために集団で活動するようになり、やがて大きな集落を形成し、人口が増えると共に田畑の開発拡大を推進しました。

弥生時代前期の水田遺構からは、水路の整備や畦畔によって、きちんと仕切りられた、非常に小さな区画の小区画水田が各地で出土している稲作農耕が本格化したことを物語っています。

しかし、稲作は食糧生産の安定と共に、貧富の差をもたらし、争が多発するようになり、農耕社会は人々を豊かにしましたが、同時に戦争の引き金になり人々を不幸にする要因にもなったのです。これは農耕社会が生んだ矛盾だともいえます。

この抗争は卑弥呼の時代と一致します。魏志倭人伝によると弥生時代後期の2世紀後半、倭国大乱という記述があり、弥生時代Ⅱ邪馬台国というイメージが強く、大和政権はもともと邪馬台国だったという説もあります。※卑弥呼とは3世紀頃(弥生時代)本にあった邪馬台国という国の女王のこと。



環濠集落風景
吉野ヶ里遺



物見櫓

弥生時代の人々が生活していた住居は縄文時代からほとんど変わってはいなかったが、弥生時代は戦乱の時代で、集団の争いも多く、その戦禍から住民を守るため、濠と柵で囲った環濠集落が出現します。環濠は、他にもオオカミなどの害獣の侵入や、

環濠集落出現

水害にも役立つという点も、環濠集落のルーツは中国・内モンゴル地方の影響が大きいと考えられています。弥生時代では、稲作農業が生業活動の大きな割合を占めています。特に西日本での農耕社会は大陸の農耕文化を、渡来人により導入されて成立したもので、大陸色が色濃く残っています。弥生文化を考へるとき、西日本の弥生社会と、それ以外の地域の社会構造の相違を、十分考慮して考える必要があります。

世界で最初に家畜として扱われたのは犬で、弥生時代、農作物の被害対策に犬が登場してきます。日本犬の原型は、縄文時代の犬と弥生時代に大陸から渡ってきた犬との交雑種で、日本犬の祖先と言われています。

弥生時代・犬

普段私たちが目にする犬は、「タイリクオオカミ」と呼ばれるオオカミ亜種として分類されていて、日本犬のルーツは「タイリクオオカミ」とも考えられています。

日本での人間と犬のかかわりは古く、縄文

になると田畑を荒らす害獣としての認識が強くなり、人間との軋轢が高まりましたが、シカ、イノシシ、サルなど、先住者であるこれら野生動物と多様な関わりをもちながら、縄文時代から江戸時代まで、一種たりとも絶滅させることなく、「棲み分け共存」を図りながら生息数や生息域を大きく変化させることなく繁栄してきたのです。

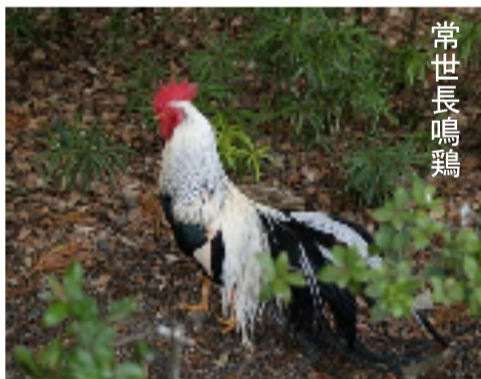


縄文柴犬

その一方で、食用にも使われていたと言います。それは縄文時代の遺跡から出土するイヌは埋葬されていたようだが、弥生時代の遺跡からは、解体された犬の骨が多く出土することから食用にされていたようだと考えられています。犬を食する習慣は日本では最近まで行われていました。

弥生時代・家畜

鶏が日本に伝来したのは農耕が始まった弥生時代(紀元前2世紀)か、それ以前とも言われ、明確な資料はなく「古事記」や「日本書紀」に出てくる有名な「天岩戸伝説」にも、神聖な動物として「常世長鳴鶏」と「常世長鳴鶏(とこよみながなきどり)」が登場します。



常世長鳴鶏

古来から日本では、食用の家畜を育てる習慣がなく、主に狩猟でシカやイノシシを食

鶏のルーツは雉だと言われています。動物の家畜化は、弥生時代に始まり古墳時

家畜が与えた社会への影響

弥生時代、家畜の存在が人々の生活に大きな変化を与えました。定住して農耕を行うには、狩猟以外の獣肉の確保が必要で、それを補うのが野生動物の家畜化だったのです。

これまでに縄文時代の人々は、獲物を求めて移動しながら食料を確保するという狩猟採集を基本とした生活をしてきたため、食料を安定的に入手することが困難という問題がありました。しかし、農業を始めると弥生時代では、定住化が進み一定の居住地で、集団作業による稲作や、家畜を飼育することによって、安定して食料を手に入れることが可能となり、人口の増加・文明の発展が急速に加速していきました。

家畜は、古代から現代まで、どの文明においても人類とは切り離せない間柄なのです。例えば、馬は戦争において強力な兵器となり、ロバや牛は農耕や物資輸送用に用いられた。また、鳥では鳩は



弥生時代前期の木製農具



弥生時代後期の鉄製農具

弥生時代前期の圃場は自然の低湿地を利用する水田でしたが、食糧供給の安定化で人口が増え、既にある水田では米が足りなくなってきたため、より広い農地を確保するために、低湿地にしばられない乾田が普及し、弥生時代後期には、現代のよ

「伝書鳩」と言われ通信で用いられているなど人類と家畜は切り離せない存在なのです。弥生時代では、代表的な家畜である牛馬は存在していなく、古墳時代5世紀に軍事用として朝鮮半島から馬が導入されています。弥生時代では牛や馬は存在していませんでした。

鉄製農具と灌漑設備の充実

弥生時代、農耕社会が成立し人々は農業の効率化のために農具を使用していました。その多くは木製農具でしたが、弥生時代後期になると金属器の普及が本格化し、木製農具より耐久性に優れた鉄の農具が開発され、現代でも使われている農具のほぼ全ては弥生時代にすでに登場していました。

弥生時代前期の圃場は自然の低湿地を利用する水田でしたが、食糧供給の安定化で人口が増え、既にある水田では米が足りなくなってきたため、より広い農地を確保するために、低湿地にしばられない乾田が普及し、弥生時代後期には、現代のよ

うに人工的な灌漑施設を用いた乾田が増え、より生産性が高まりました。

古墳時代

古墳時代とは、三世紀中頃から六世紀末頃までを指し、全国で前方後円墳などの巨大な古墳が造営された時期を言います。

一國の指導者は絶大な権威となり、その権威の大きさに比例して大きな墓が作られたのです。そうした墓を古墳と呼んでいます。

この時代には、大和王朝が統一政権として確立され、それまでの「倭国」という国号から「日本国」という国号に変更されるなど、古代国家としての日本が成立しました。 ※大和政権はもともと邪馬台国だったという



名張地方の豪族の墓
桃山古墳
名張市赤目町丈六山にて撮影

説があります。

稲作の伝来に伴い、弥代生時代より古墳時代にかけて、中国や朝鮮半島から沢山の人が日本に移住してきています。このように移住してきた人々や、その子孫ことを渡来人と呼んでいます。

古墳時代後半にはかなりの数の朝鮮系渡来氏族が移住してきています。

家畜の導入

集団で渡来してきた彼らは、農作業用の牛や農具、そして牛の飼養技術なども併せて持ち込んでいます。馬は当時、既に軍用として朝鮮半島から導入されていましたが、古墳時代後期以降では馬に加えて牛も飼われるようになり、渡来人が多く住み着いた西日本では牛による「田起こし」

が広まりました。日本では古来から家畜を育てる習慣がなく、主に狩猟で得たシカやイノシシなどの獣肉を食べていました。世界で最初に家畜として扱われたのは犬とされていますが、日本人が犬と生活し始めたのは縄文時代で、狩猟犬として大切に飼われていたようです。しかし、農業の開始と時期を同じくして、本格的な家畜の飼育が始まりました。

縄文時代、弥生時代の日本列島には馬はいませんでした。古墳時代中期になって馬の飼育という新しい文化が、朝鮮半島から持ち込まれ各地に広がりました。いきましたが、日本に牛が入ってきたのは馬よりも遅く6世紀頃と言われています。

神戸新聞HPより



鹿は地霊を象徴する動物で、豊穡を願う供物として田に鹿を捧げた。古墳からは鹿を象った埴輪

を利用した農作業が行われていたことが、古墳時代の水田跡に牛の足跡が残っていることから証明されています。

が広まりました。

日本では古来から家畜を育てる習慣がなく、主に狩猟で得たシカやイノシシなどの獣肉を食べていました。世界で最初に家畜として扱われたのは犬とされていますが、日本人が犬と生活し始めたのは縄文時代で、狩猟犬として大切に飼われていたようです。しかし、農業の開始と時期を同じくして、本格的な家畜の飼育が始まりました。

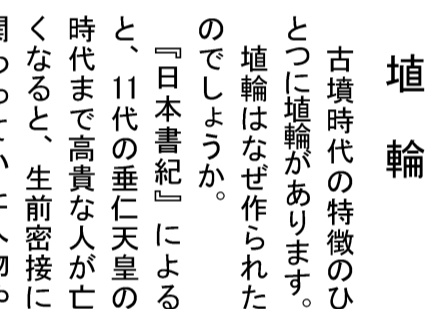
動物信仰

古代における人々と野生動物の関係は、「食うか・食われるか」の関係にあり、人は動物を狩った反面、動物に襲われてもいました。しかし、古墳時代野生動物の飼育が始まると、食用や敵対といった関係だけではなく、畏敬や愛情の伴った多面的な動物観が育まれ、いつしか人々は多くの動物を神格化して敬うようになりました。

日本の歴史の中で信仰の対象とされた主な動物は、干支に出てくる12種を始め多くの鳥獣がいますが、想像上の動物や狗神・犬神など重複して信仰対象になっている動物もいます。

猪は飛びぬけて多産で、狩られても容易には死なないので、猪は生命力の象徴とされた。古代人はその生命力に、価値を見出したのかも知れない。

古墳時代の埴輪



鹿は地霊を象徴する動物で、豊穡を願う供物として田に鹿を捧げた。古墳からは鹿を象った埴輪

も出土している。鹿は時代が下がっても、神の使いと信じられ神聖視されている。

大地の神と考えられた奈良の大神神社には蛇の神が住むという。神社に蛇の神がいるという言い伝えは各地に残り、それは土地の神であるという。家の守護神として屋敷に住む蛇を大切にすると家が繁栄するという言い伝えもある。

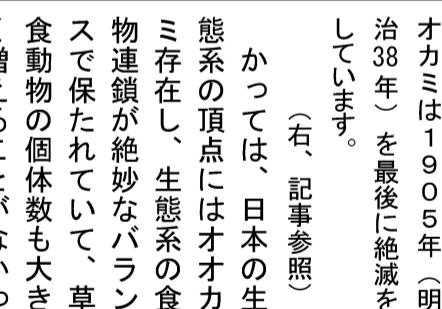
古墳時代

縄文時代以降、数百年周期で温暖化、寒冷化が繰り返され、その度に日本列島各地で大飢饉が繰り返り起きていました。

古墳時代の気候の寒冷化は世界的な気候の寒冷化に伴うものでしたが、日本列島においても気候の寒冷化は厳しいものがありました。弥生時代から定着しつつあった稲作が、寒冷化のために衰退し森林を伐採しての焼畑農耕が始まりますが、伐採跡地にはマツ科に属する針葉樹林が広がるなど植生の変化も起きています。針葉樹林には野性動物の餌となる木の実は少なく、姿を消した種も多々ありました。しかし、本来、野生動物は、自然環境のもとで人間の補助がなくとも自立的に生息できる能力があります。人々は、これら

古墳時代の埴輪はなぜ作られたのか。『日本書紀』によると、11代の垂仁天皇の時代まで高貴な人が亡くなると、生前密接に関わっていた人物や

二ホンオオカミの像



古墳時代の埴輪はなぜ作られたのか。『日本書紀』によると、11代の垂仁天皇の時代まで高貴な人が亡くなると、生前密接に関わっていた人物や

さらにはそれらを食べるのが肉食動物...というように自然界ではピラミット状の食物連鎖が形成されていたのです。

しかし、かつては原生林が生い茂っていた森林が、シカの食害により樹木や下草が枯死し土壌が崩壊するなど、森林が持つ公益的機能が生物多様性などにも悪影響を及ぼしています。

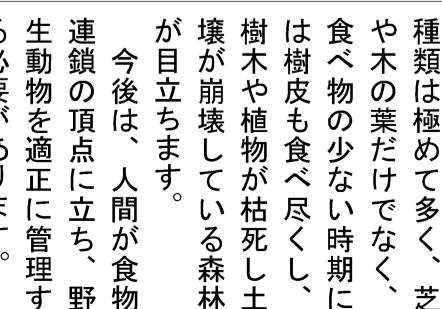
食物連鎖と日本オオカミ

戸時代までの長い年月、自然界の野生動物を適切に個体群レベルで管理できたのは、日本オオカミ(以下、オオカミと表記)の存在が大きく影響しています。

しかし、オオカミが絶滅以降100余年、イノシシ・シカなどが激増しています。『オオカミは1905年(明治38年)を最後に絶滅をされています。』

かつては、日本の生態系の頂点にはオオカミが存在し、生態系の食物連鎖が絶妙なバランスで保たれていて、草食動物の個体数も大きく増えることがなかったのです。

(右、記事参照)



植物は、土や水の中の養分や太陽光から、自分で栄養を摂取し成長し花や実をつけます。そしてそれらを食べるのが草食動物や昆虫、

さらにはそれらを食べるのが肉食動物...というように自然界ではピラミット状の食物連鎖が形成されていたのです。

しかし、かつては原生林が生い茂っていた森林が、シカの食害により樹木や下草が枯死し土壌が崩壊するなど、森林が持つ公益的機能が生物多様性などにも悪影響を及ぼしています。

近頃、テレビの動物番組などを見てみると、ライオンやチーターといった肉食動物が草食動物を捕らえて食べている様子が報道されています。

絶滅に追い込んで、食物連鎖を破壊してしましました。食物連鎖の頂点に君臨し、最強の捕食者であったオオカミの絶滅後、シカなどの草食動物が異常に増殖し、森林の草木が食べつくされ、連鎖的に生物の多様性・生態系が大きく崩れてしまっています。

草食動物の増加に伴う生態系への影響として、まず思い浮かべるのは植物への影響です。シカの好物は様々な植物です。食べる植物の種類は極めて多く、芝や木の葉だけでなく、食べ物の少ない時期には樹皮も食べ尽くし、樹木や植物が枯死し土壌が崩壊している森林が目立ちます。

今後は、人間が食物連鎖の頂点に立ち、野生動物を適正に管理する必要があります。